

M氏ノ運転シタ風景ノ記憶 ①

父は見知らぬ場所へ行くと必ず土地の人と世間話をする。

僕はちよつとそれが嫌だった。どうせ、その後に世間話で得た知識で軽い説教をしたがるからだ。しかし、そんな中でも印象に残っている言葉もある。

あれは、小学六年生の梅雨が明けようとしていた頃だ。

昨日、父は山形方面を仕事で運転し、終わってから紅花の咲く風景を観に行つた。

そこでどうやら紅花農家と話したらしい。

「正機、紅花つて知つてつかあ」

「紅をとる花だべえ」と、素つ気なく僕は言う。

「んだあ。その花は何色だか知つてるかあ」

「赤」と答えた。

「お前はそんな事も知らねえのか。橙色(だいだい)だぞ」と父は言う。

「そんな事わかんないよ」と不満顔で父をみた。でもそんな僕を無視して、

「んだがら、売り物の紅を作るのは大変。花を摘んでがら、色の九割の黄色味を抜かねば紅になんねえ。いろいろ手間掛けで、時間掛けで、やつとこき綺麗な紅にする。そんな事

お前にでぎつかあ」と勝ち誇つた顔で言つた。

「お前にも多分少しだけ良いどこはある。だがら、時間掛けで手間掛けで九割の無駄抜くんぞ」そう言つて父はにらを採りに畑に出掛けていった。

(九割が無駄かあ)その時はそう思つたが、

今はわかる気がする。本当に大切なのはたつた一割しか無い。